

○伊那市に伝わることわざあれこれ○

- 北風が吹くと大水がでる（東春近）
- 西駒へ雲が出ると近いうちに雨（長谷）
- 土にかけるスガシ（地蜂）がホにかけると、
台風が来ない年。
- 蜂の巣が低い場所にある年は大風が吹く
- 夕焼けは晴、朝焼けは雨
- 樹上で青蛙が鳴くと雨
- みみずが地面を這うは雨
- 水こい鳥が鳴くと雨が降る
- 禪（ふんどし）が下がれば雨が降る
- 夕方子供が騒げば雨が降る
- 川下で瀬鳴りがすると雨が降る
- 雷の鳴る時「桑原、桑原」と唱えると落ちない
- 火の夢は水出、水の夢は火事がある
- 猫が耳を越して顔を洗うと雨

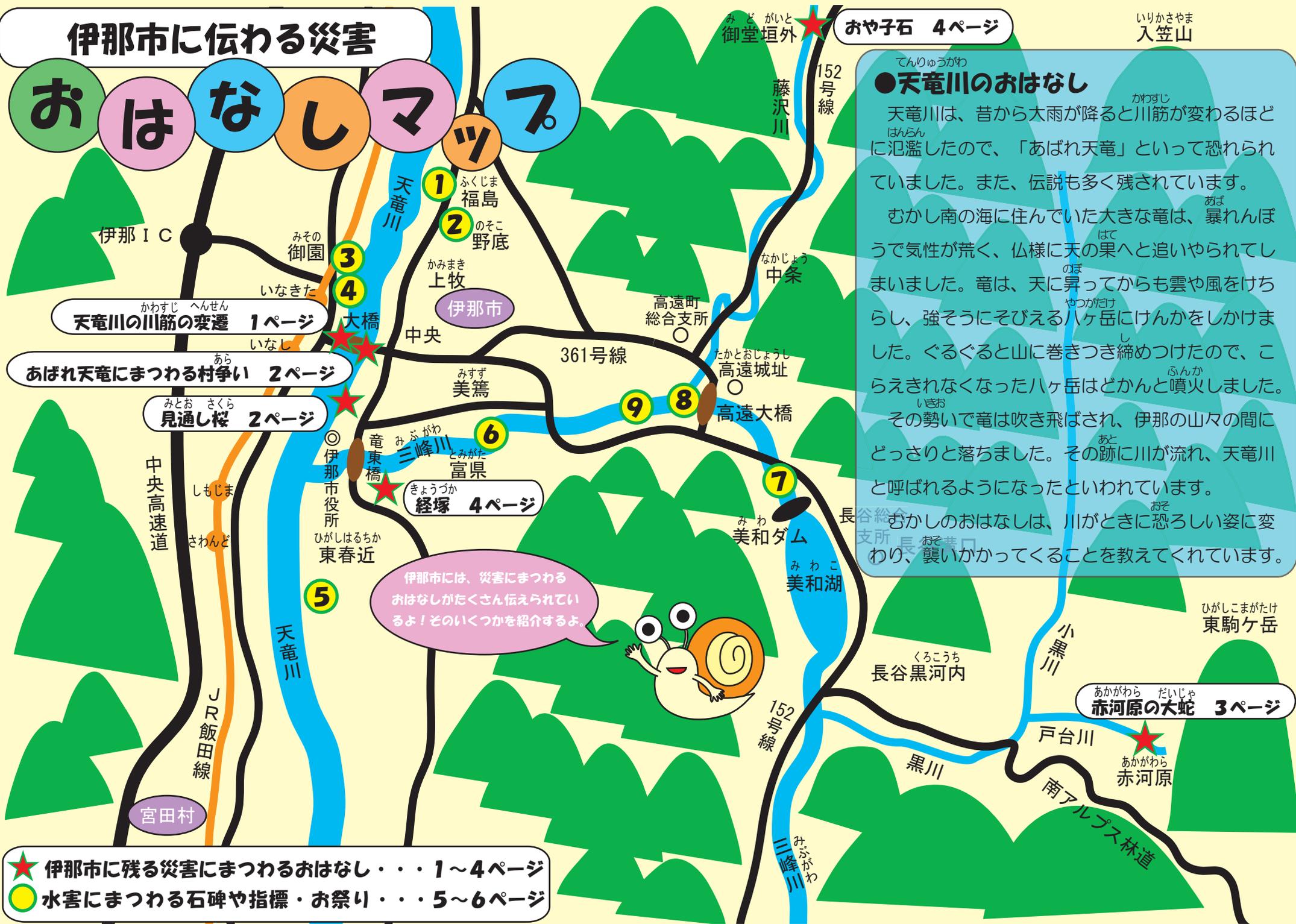
伊那市に伝わる
災害おはなしマップ



天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会

伊那市に伝わる災害

おはなしマップ



おや子石 4ページ

いりかさやま 入笠山

てんりゅうがわ
●天竜川のおはなし

天竜川は、昔から大雨が降ると川筋が変わるほどに氾濫したので、「あばれ天竜」といって恐れられていました。また、伝説も多く残されています。

むかし南の海に住んでいた大きな竜は、暴れんぼうで気性が荒く、仏様に天の果へと追いやられてしまいました。竜は、天に昇ってから雲や風をけちらし、強そうにそびえるハケ岳にけんかをしかけました。ぐるぐると山に巻きつき締めつけたので、こらえきれなくなったハケ岳はどかんと噴火しました。その勢いで竜は吹き飛ばされ、伊那の山々の間にどっさりと落ちました。その跡に川が流れ、天竜川と呼ばれるようになったといわれています。

むかしのおはなしは、川がときに恐ろしい姿に変わり、襲いかかってくることを教えてくれています。

伊那市には、災害にまつわるおはなしがたくさん伝えられているよ！そのいくつかを紹介するよ。

- ★ 伊那市に残る災害にまつわるおはなし・・・1～4ページ
- 水害にまつわる石碑や指標・お祭り・・・5～6ページ

かわすじ へんせん
天竜川の川筋の変遷 1ページ

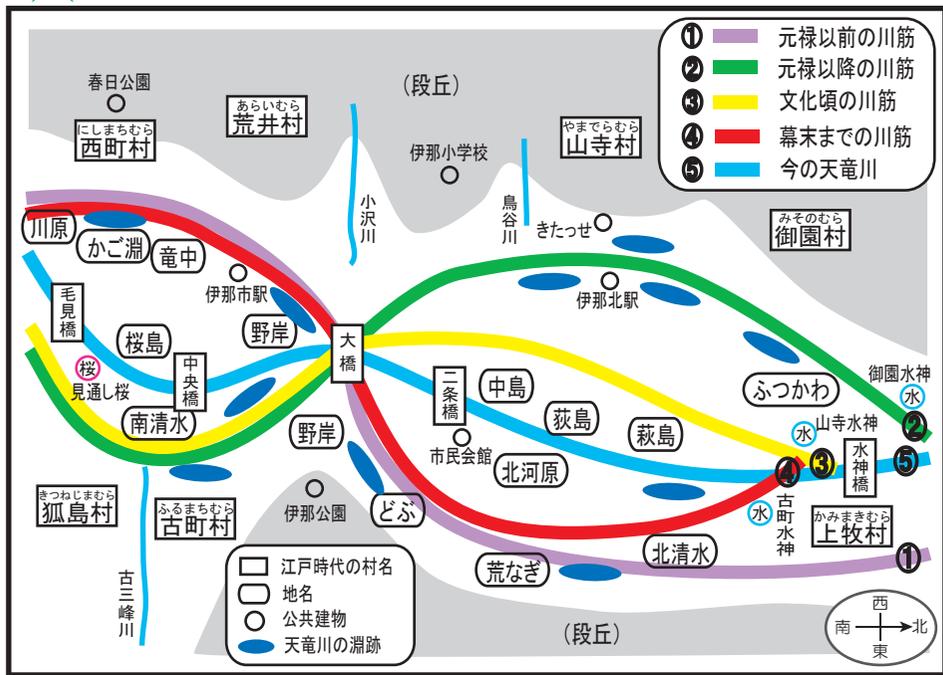
あら
あばれ天竜にまつわる村争い 2ページ

みとお さくら
見通し桜 2ページ

きょうづか
経塚 4ページ

あかがわら だいじゃ
赤河原の大蛇 3ページ

★ **天竜川の川筋の変遷（伊那市 伊那大橋を中心にして）**



（「伊那市史 歴史編，図4・17，pp.1134.」に加筆）

しっかりした堤防や護岸が出来る前の天竜川は、洪水の度に本流が蛇行し、今と違うところを流れていました。江戸時代の古文書に見られる記録や古老のはなし、川の流れる地形や淵（水が淀んで深いところ）の跡などから推定した川筋の変遷が、「伊那市史」に書かれています。

江戸時代の元禄以前の川筋は、今よりも東側の段丘沿いに流れ、大橋のあたりから西よりに流れていました。（①）

元禄から文化頃までは、伊那市の御園地区に残る水神碑のあたりから天竜川の本流が西側に切れ込み、大橋のあたりから東よりに流れていました。（②③）

江戸時代の終わり頃、長い間水害を受けてきた山寺村の願いが高遠藩に聞き入れられ、萩島から北清水・荒なぎに向かって本流を入れる堤防がつけられました。（④）

★ **あばれ天竜にまつわる村争い（伊那市 大橋あたり）**

むかしの天竜川は、「あばれ天竜」といわれ、江戸時代の約270年間に90回ほどの水害を繰り返してきました。あばれ天竜は、人々が一生懸命に耕した田畑や家を呑み込み、川を挟んだ村々の境界を変えてしまうので、村同士の争いがおこりました。むかしの人々にとって、あばれ天竜は生活の糧を奪ってしまう存在であり、守ることに必死だった姿を思い浮かべることができます。

「島」というと海や湖の中にある島を思い浮かべますが、海と無縁の伊那市にも「島」のつく地名が多く残されています。これらは、川に沿った場所につけられている特長があります。「萩島」「萩島」「中島」などは、江戸時代の天竜川の川筋に沿って残されています。

★ **見通し桜（伊那市狐島）**

むかし、延享元年（1744年）の大洪水で、村境であった「桜島」が流失してしまいました。これをきっかけに、狐島村と西町村・荒井村との村境の絵図が作製され、後の洪水による境界争いの判断の基本とされました。見通し桜は、境界を定める基準点のひとつとして絵図に記されており、二代目の桜が今も大切に守られています。



下の歌は、江戸時代の終わり頃に氾濫する天竜川をはさんでおこった、五か村の水争いを、たくみに織り込んでつくられた狂歌です。さて、争った村とは、どこの村だったでしょうか？ 左上の地図を見て、五つ考えてね。

ふるぎつね、山寺下を海にして あら恐ろしや、いま出て見れば
（答えは、7ページにあります。）

あかがわら だいじゃ はせ くるこうち
★ 赤河原の大蛇 (伊那市長谷黒河内)

むかし、はせ 長谷の山奥を流れる とうい 戸台川の
 上流に なないろ 七色のうろこを持つ だいじゃ 大きな大蛇が
 すんでいました。大蛇はときどき里にお
 りてきては わる 悪さををするので、人々に におそ
 れられていました。



あるとき、ヤマトタケルが、とうごく 東国の悪
 者 せいばつ 征伐から帰る途中、ひがしこまがたけ 東駒ヶ岳を越えて
 入野谷へと入ってきました。そこで、この悪い大蛇の話を聞いたヤマトタ
 ケルは、戸台川の河原で大蛇を見つけると自慢の太刀をふりあげました。

大蛇は、七色の輝きを放ちながら大きなとぐろを巻いて、ヤマトタケル
 を一飲みにしようと襲いかかりました。大乱闘の末、体を切りつけられた
 大蛇は、苦しみのあまりに広い河原をのたうちまわりました。

そのとき、大きなうろこが空高く飛び散り、大空にキラキラと虹を輝か
 せながら南アルプスの深い谷の中へと散り散りに落ちていきました。

そして、とうとう大蛇は息が絶えてしまい、あたりの河原は噴き出した
 大蛇の血潮で、燃えるような赤色に染まっていました。

ヤマトタケルは、退治した大蛇の頭をたずさえて、溝口の里まで降りて
 くと、大きな桑の木のでそばに大蛇の頭を埋めて、人々を苦しみから救い
 ました。その後里の人々は、尾張の国から熱田神宮 (現在の名古屋市熱田
 区) をおむかえして、ヤマトタケルをお祀りしたということです。

▶ ヤマトタケルが大蛇を退治した河原付近の石はどれも赤い色
 をして、そのあたりは、今も「赤河原」という地名が残され
 ています。また、みぶがわ 三峰川には、七色に輝くきれいな珍しい石があ
 り、人々から「三峰川の七石」と呼ばれています。

たかとおまち み ど がいと
★ おやし子石 (伊那市高遠町御堂垣外)

ずうっとむかしのことだ。大じしんでな、地山がくずれて、ドドドーっと
 土砂が、おしだしたと。地山には、おやし子の山犬がすんどったが、おったま
 げて逃げだしたとき。さきに母犬が、小犬をつれてな。あとから追いかけて
 きた父犬は、ワン、ワン、ほえながら逃げていった。が、御堂垣外まできた
 時に、ふじさわ 藤沢の蛇ぬけにおしながされて、石になってしまったそう。母犬と
 小犬は、キャン、キャン、なきながら、どんどん逃げた。けれども、おっかなく
 て、せつなくて、とうとう中条でな、ぺったりすわりこんだまま、二つの
 石になったとき。それだもんで、父犬の石を「犬石」といい、母犬と小犬の
 石を「子つれ石」とよんだそう。

それから、「地山おしだす、犬石ほえる。ないてにげるは、子つれ石。」と
 うたわれるようになったとき。それらの石は、今はない。道ぶしんにでも
 つかわれてしまったのかな。(「天竜川の災害伝説、伊那の民話-信濃の民話5」より)

▶ 大量の水を含んだ土砂が、一気に流れ下る「土石流」を「蛇抜
 け」といったりします。「おやし子石」のおはなしは、地震で山崩
 れがおこった後に、大雨などが引き金となって「蛇抜け」が襲って
 くる危険性があることを私たちに教えてくれています。

きょうづか ひがしはるちか ろくけんや
★ 経塚 (伊那市東春近六軒屋)

あ 荒れ狂う水の勢いを目のあたりにして、川が静ま
 るよう、人々は繰り返して祈りました。三峰川を見下
 ろす段丘のふちに、「経塚」と呼ばれる古墳があり
 ます。文化六年(1809年)に三峰川が大洪水にな
 り、上殿島地籍は大きな被害を受けました。その際、
 人々が水難除けの大般若経を転読し祈禱を行い、こ
 の場所に経文を埋めたといわれています。



洪水を鎮めるために祀られた水神碑やお祭り、
水との闘いの歴史や出水の指標など、昔の水害を今に伝え
てくれる場所が、伊那市にはたくさんあるよ！



水害にまつわる石碑や出水の指標・お祭り

1 福島ふくしまの九頭龍神くすりゅうじん（伊那市福島）

堤防裏肩せっちに設置されている九頭龍神です。九頭龍は、戸隠神社とがしじんじやの水の神様で、江戸時代の頃には、治水工事ちすいこうじの前線ぜんせんに建てられました。



（「三十年のあゆみ」より）

2 柵立さくたての碑のそこ（伊那市野底）

洪水の惨状さんじょうから美田びでんを守るため、高遠藩たかとおはんの郡代ぐんたい「坂本天山さかもとてんざん」は、数万人の労力と莫大な費用をかけ、自ら指揮しきをとってこの地に柵立堤防さくすを築きました。



3 双葉神社ふたば（伊那市御園みその）

当初、天竜川と大清水川おおしみず ごとりゅうてんの合流点の堤防上にあつた一本杉いっほんすぎのもとに水神すいじんとして祀まつられていました。その後護岸工事ごかんこうじに伴い移転いてんし、社殿しゃでんが建設けんせつされました。



4 山寺やまでらの水波能売神みづはのめのかみ（伊那市山寺）

「水波能売神」は、日本神話に登場する水の神様です。イザナミが火の神様を生んで火傷やけどし、苦しんでした尿にょうから、五穀ごこく・養蚕ようさんの神とともに生まれました。



5 天龍川改修記念碑かいしゅうきねんひ（伊那市東春近田原ひがしはるちか たわら）

昭和22年6月天竜川が直轄編入され、最初に着手ちやくしゆされたところに建てられた記念碑である。
（「三十年のあゆみ」より）



6 さんよりこよりみすず かわて（伊那市美篤川手とみがた さくらい・富県桜井）

「さんよりこより」とは、洪水をおこす厄病神やくびょうがみを叩き潰たたすかけ声つぶです。昔の洪水で、順に流れつい天伯様てんぱくさまを御輿みこしに担かつぎ、三峰川みぶがわを歩いて渡ります。



7 波切り不動明王像なみき ふどうみょうおうぞう（伊那市高遠町勝間かつま 勝間大橋）

三峰川沿岸は梅雨に、台風つひに、いつも洪水におののいてきた。そこで、勝間の村人は、水の脅威を鎮めてもらおうと不動明王ふどうみょうに登場願かつまった。（「天龍川の川の碑」より）



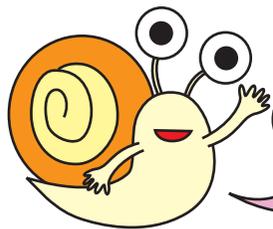
8 高遠弁財天たかとお べんざいてん（伊那市高遠町 弁財天橋）

河中の天然石てんねんせきの上に祀まつられている弁天様。過去の幾多の洪水にも流されたことがないという。岩は、自然の量水漂りょうすいひょうのやくめもしてきた。（「三十年のあゆみ」より）



9 米高岩たまち てんによばし（伊那市高遠町多町 天女橋）

天女橋の下にある。三峰川の水がその岩に当たって流れる年は、お米ねだんの値段ねだんが高いという。
（「長野県上伊那誌5 民俗篇上」より）



おかしから語り継がれてきた災害のおはなしには、災害から身を守る知恵や「二度と悲しい思いをしてほしくない」という人々の願いが込められているよ！もっとくわしく知ってみよう！

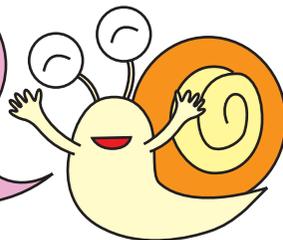
- **まずは、家族や地域の人に聞いてみよう！**
- **図書館で市町村誌や本を調べてみよう！**
- **おはなしにまつわる場所に行ってみよう！**

学習施設や災害の記録に関する本

- **砂防情報センター**
(<http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/hyaka/kouhou.html>)
- **語り継ぐ天竜川シリーズ**
天竜川流域の災害・環境・歴史・文化などをテーマに執筆され、現在全61巻。天竜川上流河川事務所のホームページからダウンロードすることができます。
(http://www.tenjo.go.jp/~jimushohp/hyaka/publication/pbl_tell/pbl_tell.html)
- **長野県災害体験集**
(<http://www.pref.nagano.jp/kikikan/bosai/taiken/htm/index.html>)
- **「上伊那川たんけんブック 天竜川とわたしたちのくらし」**
(平成18年5月1日刊行)
編集：上伊那川たんけんブック編集委員会、上伊那教育会郷土館部専門委員会
企画・発行：国土交通省中部地方整備局 天竜川上流河川事務所

こたえは、
古町村・狐島村・山寺村・荒井村・西町村の5つ
だよ！「ふるぎつね」は古町村・狐島村の百姓たちのこと、
「山寺下」は大橋の西側あたりのことで当時は、山寺村だったんだ。
「あら」は荒井村、「いま」が当時の西町村にあった伊那部宿のことで、天竜川の洪水を高見の見物ができた場所なんだよ。

クイズの答え



参考文献

- **「天竜川の災害伝説」**（平成5年3月19日発行）
著者：笹本正治 企画・発行：建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所
- **「天龍川の川の碑」**（平成20年発行）
著者：竹入弘元 企画・発行：国土交通省中部地方整備局天竜川上流河川事務所
- **「伊那市史 歴史編」**（昭和59年9月27日発行）
編集：伊那市史編纂委員会 発行：伊那市史刊行会
- **「長野県上伊那誌5 民俗篇上」**（昭和55年1月15日発行）
著者：上伊那誌編纂会 発行：上伊那誌刊行会
- **「三十年のあゆみ」**（昭和55年3月発行）
発行：建設省中部地方建設局天竜川上流工事事務所

お願い

天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会では、天竜川上流域に関する過去に起こった災害の記録や地域に伝わる災害伝承を収集・整理し、そこから得た災害教訓を活かして地域の防災力向上に役立てていく試みに取り組んでいます。

貴重な資料、ご意見などございましたら下記連絡先にお知らせください。

<連絡先> 天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会事務局

〒399-4114 長野県駒ヶ根市上穂南7-10

国土交通省 中部地方整備局 天竜川上流河川事務所

担当：調査課（電話：0265-81-6415）

<編集> 日本工営株式会社

※本誌の記事・写真・図表の無断転載は堅く禁じます。